

漫吟集 伝本考

——龍公美筆写本について——

築 瀬 一 雄

本誌第三十六集の「漫吟集伝本考——拾貝和歌集について——」に於て、契沖全集第七卷所収の漫吟集十卷本の序文と本文との内容上の矛盾を指摘したことがあつた。ここに岩瀬文庫所蔵の龍公美筆写本を紹介し、それが十巻本に極めて近いものであること、従つて十巻本は天明八年の京都大火によつて版木を焼失したばかりでなく、元来は二十巻本の前半部に相当するものと推定すべきであることを述べ、更に、龍公美筆写本の第一巻乃至第十巻の十巻本に対する異同につき解釈を加へることにしたい。

一

西尾市立図書館岩瀬文庫に、漫吟集四冊（一四七／三六）を蔵し、同文庫目録には「龍公美自写」と注記して掲出してある。この本について紹介する。

漫吟集は、半紙判（24.1×16.5cm）袋綴の四冊本である。表紙には、洗刷き紙を用ひ、その左上に、題箋があり、「漫吟集 天」の如く認めてある。すなはち、四冊は、天、長、地、久となつて居り、その内容は、

天 序、目録、巻第一～巻第五
長 目録、巻第六～巻第十
地 目録、巻第十一～巻第十六
久 目録、巻第十七～巻第二十、奥書

に分かれてゐる。内題は、各冊「漫吟集巻第一」の如く統一されてゐるが、目録の表記法は、「漫吟集巻一外題」の如く整つた形のものもあり、「漫吟集巻第十一」の如く「外題」の字を欠くもの、冊のはじめ以外の巻序を示すに「巻第〇〇」と第の字を存するものと存せぬものがあり、部立についても、「雑歌二」は「二」を存し乍ら、一に当るものは、ただ「雑歌」とある点など、完全には整備が行きとどいてゐない。

各冊とも、巻頭には遊紙一枚を存し、（巻末には遊紙はない。）、見返しには、本文の書き損じた紙を用ひたものが四枚存する。印記は、各冊同じで、「無事葺図書記」、「谷森書置」、「紅長」、「岩瀬文庫」の四類が存する。

各冊とも、すべて龍公美の筆写であり、墨付枚数は、天六十二丁、長五十二丁、地六十四丁、久五十七丁である。久の巻末は

「漫吟集卷二十大尾」とし、次丁に次の如き公美の奥書が存する。

此本ハ契冲師の自筆し給へる所の真本を円珠庵主よりかりもとめものにして本文加入の歌及び墨かき朱書或墨けち朱けちにいたるまで原本のまゝにうつし侍ものなり誠に冲師の和歌における千古一人なる事たれかいなむ人あらんやさるをやつかれやすくこれをうつし家にひめおく事をうれしみかくへかいつけぬるものならしときに宝曆二とせきさらき望の日

草廬主人龍の公美

二

前掲の奥書によつて明かなように、公美は宝曆二年（一七五二）に漫吟集を筆写してゐるのである。一方、彼が十卷本に加へた漫吟集叙の年記は、天明紀元春となつてゐる。天明は、安永十年（一七八一）四月二日の改元であるから、この紀元春は如何かと思はれるのであるが、それは問はぬこととしても、彼が父善昌と良舜僧都の筆写した漫吟集を上梓しようとした時点に於て、その本以外に、彼自らが筆写した別本を所持してゐたと云ふことは輕視出来ない。では、公美は何故に刊行にあつて、自分の筆写したものを捨て置いて、父らの写したものを採用したのであらうか。再びその叙に就いてみたい。叙は先づ、

家君台眞翁在曰、雅好國風、而師事浪華沙門契冲上人者有年矣。

と筆を起してゐる。そして、

故上人所著述之書、一々謄写以祕于家、奉崇不啻趙壁隋珠耳。

と記し、父が良舜僧都と携へて契冲を訪ひ、漫吟集の借用を申し入れたこと、それに対して、

上人素與家君善、輒容易許焉。

と述べてゐる。これらを見ると、公美が若山隆賢の請に依じて漫吟集の上梓を計画した心情には、父を表さんとする意志が大きな比重を占めてゐたことが覗へるのである。これを裏返した言葉として、

美玉沾哉聖人之言也。夫上人之所著、固美玉也。則豈敢得不沾諸世上歟。遂授與于隆賢。

を見得るならば、公美が刊行を許す漫吟集は、彼の筆写したものであつてはならず、父の筆写した漫吟集であるべきであつたことが判ると思ふのである。

では、これら二部の漫吟集は、如何なる関係にあるものであらうか。叙は云ふ。

於是與僧都勸力寫之、三旬而功成。家君之喜可知也。乃以爲帳中之祕、夙夜不釋手、遂以沒齒。爾來六十年于今矣、傳而而公美。々々以爲吾家舊青影也、藏之者益堅。

ここに注意すべきことは、天明元年をさかのぼること、少くとも六十年以前に写されたものが、公美刊行本の原拠本であつたと云ふことである。仮に天明から六十年を逆のぼると、享保六年（一七二一）となる。しかし、これは、契冲歿後二十年であるから、善昌が契冲から直接に借りて写し得たものは、更にそれ以前

でなければならぬ。

一方、公美自身が宝暦二年に円珠庵主から借りて筆写したものは、契沖歿後に円珠庵に伝存したものである筈であり、久松先生が、漫吟集諸本について、「自撰私家集成史もしくは成長史をこれによつて知ることが出来るのである。」(人物叢書「契沖」九三頁)と記して居られる諸本のうちの一本であると考へられる。久松先生は、又、同書八六頁以降に、次の如く記して居られる。

『漫吟集』の自筆稿本は大阪の殿村家にあり、四冊本である。関戸家にも春だけであるが自筆稿本があるが、殿村家蔵のが初稿本で関戸家のは再稿本である。『漫吟集』の初稿は長流の序があるから貞享のころまでには出来たと見られるが、前からも草本があつたらしく、それから後も手許において絶えず書入れを行なっている。この稿本から出た写本もあるが、それぞれ異なっているのは、自筆稿本そのものが次第に成長したのであり、関戸本はそのある段階に清書したのである。その成長過程にある稿本から写本もなっているが、その写した時によつて相違するのである。上賀茂文庫にある『漫吟集』の写本は今井似閑の旧蔵本で信頼すべき写本であるが、自筆稿本の、ある段階の写本であるから自筆稿本とは相違がある。関戸家蔵の自筆稿本は殿村家の自筆稿本に書入れてある歌が本文に書きつがれてあるから清書本と見るべきであるが、それも最後の段階かどうか疑わしい。

これによると、先生は殿村家蔵本を初稿本とし、関戸家蔵本を再稿本と見て居られる。そして、三手文庫蔵本などを、漫吟集成

長史に於ける一段階にあるものとせられるのである。契沖全集の第七巻には殿村家蔵本の写真一葉、第九巻には殿村家蔵本の写真六葉、関戸家蔵本の写真二葉、人物叢書「契沖」には殿村家蔵本の写真二葉、関戸家蔵本の写真一葉が示されてゐる。私は未だ殿村関戸両家の蔵本を見る機会を恵まれてゐないので、取りあへず此の十二葉の写真についてののみ所見を整理しておきたい。

(一) 第七巻所収の殿村蔵本の写真を見ると、大きな字で書かれてゐる歌は十巻本の内容に近く、細字の書入れの歌は十巻本には見えず、二十巻の類題本の方に採録されてゐる歌を含んでゐる。

(春部巻頭)

(二) 第九巻二〇八頁の写真二十三図は、類題本六三九頁下段の第一首から第十二首までに当るものであるが、その第五首と第六首の間に、

八重にはふならの都のさくら花おなしさかりのあての山ふきの一首が入り、十三首になつてゐる。このやうな相違はあるが、十巻本との大きな相違に比すれば、類題本に接近してゐることが明かである。

(三) 第九巻三五三頁の写真三十一図は、十巻本の五八五頁下段から次頁上段、類題本の六五六頁から次頁上段へかけての部分に当るが、両本のいづれにも大きく相違する。先づ、

涼しさにおほえすねふる夢なからねぬにおとろく秋の初風
生田川せたえの水へそれなから秋の声するもりの下里

の二首は、両本のこの部分に見えぬものである。そして、
けふとてもころづからは
おほ空のおなし心にことゝはぬ萩に声かす秋の初風

は、傍線部を削除して、傍記のやうに訂してあるのであるが、両本ともにその訂正の如くになつてゐる。

(四) 第九卷三五頁の写真三十二図は、類題本の七〇一頁下段に当るのであるが、「いくゝすりもとめしことはかひなくてひとのためになかりけるかな」で終り、その下に余白を残したままになつてゐる。類題本にある「逐日懷旧」などの歌は書かれてゐない。

(五) 第九卷二二一頁の写真二十五図は、類題本七三八頁下段の第一行から第十三行に当る。詞書の中の「林葉集」の傍記補入は、類題本で本行に入れられて居り、「下河辺長流」の下に二行の割註として書き、墨で消したものは、類題本では全く削られてゐる。

(六) 第九卷の巻頭図版は、類題本の七五六頁上段に当るが、殿村本の「といしへに」・「後瀬山」の二種は書入の形を見せて居り、類題本ではそれ／＼についてゐる詞書が、殿村本には書かれてゐない。又、「住人は」の歌は、類題本では「題不知」となつてゐるが、殿村本では、次の長い詞書が存する。

高野の山にすめる僧にあひて物かたりなとしけるに山にすめるおほくハ橋慢の心山にひとしくしてなとなくをきゝて
(七) 第九卷二〇九頁の写真二十四図は、類題本七六一頁の下段に当るが、非常に異同が多い。そして、類題本に見えない、次の文がある。

如水かうつし候ひける時鳥犀園しかるへしと人のをしへけれ
ハ水戸宰相殿の御うちなる人までもとめてもちゐけれとその

しるしも見えさりけるを如水ミまかりて後そのゝこれををい
せのかめ山にあるおとうとか……

(八) 「契沖」五二頁の写真は、巻第六の巻頭に近い部分である。書入れの無い丁であるが、これを両本に比較してみると、十卷本に近いことが明かである。十首の内、十卷本と異なるのは二首の増加である。そして、他の八首はその排列も全く一致し、歌詞の訂正を施した一首は、十卷本に於ては、訂正後のものとなつてゐる。

(九) 「契沖」八四頁の写真は、類題本の巻第十八の一丁である。十卷本にはこの部分が存しないので比較が出来ないが、類題本は殆ど一致し、写真に見える加除の結果と合致する。

以上を通覧すると、殿村家本は、十卷本よりも類題本の方に近いものと思はれる。勿論そこには、増加とともに削除が、それ何回にもわたつて繰返されてゐる複雑な過程が覗へるのである。そして、殿村家本には兄如水の歿のことが見えるから、その歿年である元禄十一年一月二十五日以降のものであることは注目すべきであると思ふ。

次に関戸家本について、考へてみたい。

(一〇) 第九卷二〇五頁の写真二十一図は、序の一部である。「舟木よりそめし」・「それよりさきに出る人ハ」などは誤写かと思はれるが、「すへてミナ」と「すへて」と「ミナ」を併せ存し、「西行寂然を」と「ら」の存することが注意される。

(一一) 第九卷二〇六頁の写真二十二図（二十一は誤植）は、十卷本の五六二頁下段から次頁上段に当り、歌の排列も大体十卷本と

同じであるが、次の一首は十巻本に存しないものである。

鶯のいかにちきりて梅かかにはる待やせし色のミゆらん

この一首は、①を「いろか」、②を「花」として、類題本に存するものであるが、類題本のこのあたりは歌が頗る増加して居り、近似のものとは云ひ難い。十巻本の方に近いと云ふべきであらう。

曰「契沖」八七頁の写真は、巻第二の巻頭近くに相当するのであるが、これを十巻本に比べると、十五首がそのまま一致する。従つて、類題本とは大きな異同を見せてゐるのである。

以上の所見を整理してみると、殿村家本の原形は十巻本に近似し、書入補訂部を加へたものは類題本に近く、更に殿村家本の記事で、類題本の方では削られてゐるものもあると云ふことになる。一方、関戸家本は、十巻本に近く、類題本とはかなりの距離にあると云ふことになるやうである。

さて、以上の検討では、久松先生が「関戸家蔵の自筆稿本は殿村家の自筆稿本に書入れてある歌が本文に書きつがれてあるから清書本と見るべきであるが」とせられた点を検証することは出来ないのであるが、現存諸本中最も歌数の多い類題本と、それより歌数の少く、その前の段階を示してゐると考へられる公美刊本との関係に於てみる場合には、関戸家本・殿村家本の関係が、やや複雑なものであることを思はせられるのである。

さて、このやうにして、久松先生の御研究に依存しながら、漫吟集諸本の相関する一端をうかがつたのであるが、今ここに紹介したところの公美筆写本は、諸本中で、十巻本として公美の刊行

した本に最も近いものである。しかし、全く一致すると云ふのではなく、此の本の前半部と比較すると、又相当の異同が認められるのであるが、それは後の項にゆづり、ここでは、序文の問題を解決しておきたい。

先の拙稿で、公美刊本に序文が存し、それが内容の点から見て、雑部までを含むものにふさはしいことから、公美刊本は甘巻本の前半に当るものと考へるか、元来は序を持たぬものであり、刊行に当つて公美が他の資料から挿し加へたと考へるかの二つの解釈が成り立つことを云ひ、結論的には、後者に傾いた考へを述べたのであつたが、ここに公美筆写本を見るに至つて、これは訂正すべきであるとせざるを得ない。久松先生も、「龍公美刊本もある年代における稿本の前半を版にしたものと見られる。」（人物叢書「契沖」八八頁）と述べて居られる通り、公美刊本はその後半が未刊のままに終つたものであり、その序は元来存在したものと考へられるのであるが、公美筆写本の序は又、いささかではあるが、文の異同を示してゐる。それを次に示すこととする。

契沖全集第七卷所収の十巻本巻頭に置かれたものと対比する。仮名漢字の相違や送り仮名の有無は省略するが、必要に応じて、同書所収の漫吟集類題の方の序をも参照する。

(1) 五五四段上段の、「それよりさきに出来る人は、僧といへと、すへて、みな、歌の林のひた人のみをおほかる。」のところは、傍線を施した部分が、公美筆写本には存しない。

(2) 五五四頁下段の、「たゞ西行寂然をかたみにたてゝ」のところは、公美筆写本には、西行寂然の下に「ら」が加はつてゐる

る。(類題本同じ。)

(3) 同じく「満誓沙弥かふるきをのゝえつたへては、雲たつ山のしけみわけいり、」のところは、読点の問題になるが、「……て、八雲たつ山の……」となるべきで、公美筆本では、明らかに八が漢字になつてゐる。(類題本同じ。)

(4) 同じく、「かのから人の、としをへてなせりとかいふなる」の傍線部は、公美筆写本では「とゝせを」である。

(5) 同じく「みやこふたつの賦にそいひつゝくへき。」の傍線部は、公美筆写本には「いひつゝくへき」になつてゐる。

(6) 五五五頁上段の「これにおとろかさめやは」の傍線部は、公美筆写本では「やも」になつてゐる。

(7) 同じく「下河辺長流序」は、公美筆写本には存しない。(類題本では、序の一字が存しない。)

以上の異同は如何に考へるべきであらうか。こゝで、架蔵A本(本誌第一期第十三号に紹介したもの)をも参照しながら、私見を述べてみたい。

(1) については、公美筆写本のみが、「すへて」を脱してゐる。

この「すへて」は次の「みな」と同意で、不要とも考へられるが、伝本の多きに從つて、公美の筆写時に於ける無意識な脱落と見るべきであらう。

(2) については、十巻本のみが「ら」を脱してゐるので、架蔵A本にも存する。これは刊行時の校正の不備かと思はれる。(契沖全集所蔵の写真によると、関戸家本の序にもこの「ら」は存する。)

(3) については、架蔵A本では、仮名とも漢字とも見られる字体であるが、「八雲たつ」の方が文が整ふと思ふ。

(4) については、加蔵A本は「とゝせをへて」である。すると、今参照してゐる伝本の範囲では、全く二対二の同率であるが、これは後漢書卷第九十八張衡伝の「衡乃ち班固の両都に擬して二京の賦を作り、因つて以て諷諫す。精思傳会十年にして乃ち成れり。」によること明かである。

(5) については、架蔵A本も「いひつゝくへき」であり、意味から見ても、さうあるべきところであるから、公美筆写時の誤脱とすべきである。

(6) については、架蔵A本も「やは」であり、「やも」とするのは、公美筆写本のみである。どちらともとれるが、多きに從ふべきであらうか。すると、公美筆写時の無意識の誤写と云ふことになる。

(7) については、架蔵A本も公美筆写本と同じく、「下河辺長流」乃至「下河辺長流序」は全く存しない。恐らく写本で伝はつてゐる間は存せず、十巻本にしても、類題本にしても、刊行時に必要として加へたものと思はれる。架蔵A本と公美筆写本とが、元來存在する署名を共に削つて写すと云ふことは考へ難いからである。

かう考へてみると、公美筆写本にも誤写が無いとは云へないけれども、十巻本序の誤りを訂するに、大きな役割をはたすものであることが認められるのである。これは、本文についても、ひとしく言ひ得るところである。

三

公美筆写本は、今までに管見に入つた漫吟集伝本の中では、十卷本に最も近いものである。十卷本が、前項までも察せられるやうに、元来二十卷であるものの前半部であり、それが天明八年の大火によつて、校正刷を残すのみで終り、その数奇な運命と、他本との関係から見ても、貴重な資料的価値の認識によつて、契沖全集に翻刻せられたのであつたが、これと近い伝本であり、しかも二十卷揃つてゐるものが、十卷本の刊行者である公美自身によつて筆写され、しかも現存することは、漫吟集研究上に極めて貴重な資料を提供することにならうと思ふ。

次に公美筆写本の前半部と、十卷本との異同を示すことにする。

先づ、公美筆写本には、外題（目録）が存する。この外題について、前稿に於ては、刊行にあたつて公美が作製して加へたものであらうと考へたのであつたが、それは訂正しなくてはならない。十卷本では、第二、第三の如くなつてゐる所が、公美筆写本では、卷二、卷三の如くなつてゐたり、第七の如く、十卷本のままであつたり、卷第八の如く、卷と第との両字を備へてゐたりする相違がある。これは恐らく、公美筆写本の如き不統一の状態が原形であり、刊行に當つて整へたものであらう。又、十卷本に於ても、外題が五卷までと、六卷以下とに分かれてゐるのは、その原本が、公美写本と同じく二冊（全部では四冊）になつてゐたことを示すものと思はれる。外題に於ける歌題の排列は、卷五と卷

八の両卷を除いては、全く一致する。しかもこの両卷に於ける相違は、相互の誤脱によるものと思はれる。それは、次のものである。

卷五の後半を対照してみる。

（十卷本） （公美筆写本）

- | | | |
|----|------|------|
| 1 | 杜納涼 | 行路夕立 |
| 2 | 行路納涼 | 行路納涼 |
| 3 | 夕立 | 夕立 |
| 4 | 行路夕立 | 海辺夕立 |
| 5 | 市夕立 | 市夕立 |
| 6 | 野夕立 | 野夕立 |
| 7 | 海辺夕立 | 荒和祓 |
| 8 | 扇 | 扇 |
| 9 | 蓮 | 蓮 |
| 10 | 荒和祓 | |

かなりちがつてゐるやうに見えるが、これは本文に當つて見ると、公美筆写本に於ても題の順は十卷本と全く同じであるので、外題のこの部分を写す時の誤脱か、或は公美が写した原本に於ける不備かのどちらかとなる。後者であるとする、十卷本の原本の方が又、問題とならう。それは、全体の本文の比較から、公美筆写本の方が内容の整理が行きとどいてゐると思はれるので、十卷本の外題は、その原形を刊行の時に、公美が整備したものであり、その原形は、公美筆写本の如くなつてゐたのではないかと思はれるのである。それは、卷八の外題の状況から推定されること

である。

卷八の外題では、十卷本に於ける櫛衣と山家櫛衣との間に、公美筆写本では、田家櫛衣が存する。本文にあたると、ここは両本とも一致して田家櫛衣の一首が置かれてゐるので、外題に於ては当然これがあるべきであり、十卷本の方の脱落と云ふことにならうと思はれる。従つて、十卷本の原本の外題の不整備が認められ、巻五の場合を以上のやうに推定したのであるが、これも最終的には、十卷本の原本の出現を待望することになるのである。

以上の外、外題については、あやめ―菖蒲、いつみ―泉の如き、仮名と漢字の相違、郭公―時鳥、夕顔―夕貝の如き、漢字表記の異同が見られ、これはどちらにしても大した問題ではないと思はれる。ここでも一つの推測を加へるならば、十卷本の外題に於ては郭公に統一されて居り、公美筆写本では、これが郭公・時鳥の阿様になつてゐる点から見ると、十卷本の外題には、刊行時に於ける公美の手が加はつてゐるかも知れないのである。(巻七の「萩」が「萩」となつてゐるのは、公美筆写本の誤写である。本文では「萩」である。)

次に本文の異同に移ることとする。

(1) 五五九頁下段の、「雪中若菜二首」は、公美筆写本に於ては、五六〇頁上段の「残雪」の前になつてゐる。結果として、この二首を除いた他はすべて、「若菜」の題下に入つてゐるのである。これは、十卷本から公美筆写本への移動と考へられ、その逆は考へ難い。

(2) 五六一頁上段の、「雨中鶯一首」及びその次の「雨ふらば」

の一首計二首は、下段の「故郷鶯」の前に入り、題詞についてある一首は削られてゐる。これも(1)と同様に考へられる。更に云へば、十卷本の原本に於ける「雨ふらば」が後から追補されたものであり、その場合、前の題詞に加へられてゐた「一首」が、改められないままの姿であつた不備が、公美筆写本の原本で改訂整備されたことを証するものと考へられるのである。

(3) 五六一頁下段最後の三首、「あさちふの」・「山かけて」・「梅かゝも」は公美筆写本に存しない。公美筆写本の原本に於ける契沖自身の棄除歌であらう。

(4) 五六二頁上段は、「もとかしは」の一首であるが、公美筆写本では、これに「題しらす」の詞書が加へられ、次に、山かけて見ゆる春野に立くれぬ寒からぬ風に袖をふかせての一首が加へられてゐる。公美筆写本の原本に於ける追加記入であらう。

以上が巻一に於ける異同のすべてである。巻二以降に於ける異同についても、その解釈は大体上述に準じて考へてよいと思ふ。本稿は紙数の制限があり、公美筆写本の全巻を碧洞叢書に翻刻する予定であるから、一々排列の異同と歌の増減を示すことを省略する。そして、調査の結果のみを述べることにする。

(1) 公美筆写本の原本に於て、除去された歌は三十一首である。

(2) 公美筆写本の原本に於て、増加してゐる歌は四十首である。

(3) 公美の筆写時に於ける誤脱が一首ある。

(4) 公美の筆写時に於いて、目移りによつて二首の上下句を合せて一首の形にしてしまつた場合が二回(四首分)存する。

以上によつて、公美筆写本の原本は、十巻本の原本をもととして、之に補訂が加へられたものであり、その逆はあり得ないことは明かである。公美筆写時のあやまちを少々ふくむけれども、両本の比較によつて、漫吟集の整備が進められた情況が十分に観取出来るのである。そして、この点から公美筆写本の資料的価値が、高く評定出来るのである。

次に、十巻本の歌詞の不審箇所が、公美筆写本との対比によつて訂正される場合が少くない。十巻本の原本は天明の大火にくしくも焼け残つた一部の校正刷の由であるから、十巻本のあやまりは、その校正刷に於けるものであるか、又は契沖全集に収めて活字化した折に生じたものであるかは、校正刷について確めないと判然としないわけである。十巻本と公美筆写本との厳密な校合はまだ行つてゐないのであるが、前掲の如く、歌の異同を調査した際に気づいたものだけを、取りあへず抄記しておく。(歌の位置は、全集本のそれによつて示すこととする。番号はその段の歌の順による。又どちらが正しいか不明の異同には△を傍記する。)

五六二頁下段1 梅か[△]に梅か校に

〃 〃 18 をしては過し[△]をられては過し

五六一頁上段11 鶯の[△]鶯も

五六八頁下段15 いかえなる[△]いかなる

五六九頁上段16 いえかねて[△]いみかねて

五七二頁下段2 ふるさと[△]はふるさとよ

五七三頁下段4 [△]よしの山[△]の山
五七六頁上段7 花にあかて[△]花にありて

〃 〃 〃 うゑし木陰に[△]うゑし木陰そ
五九一頁下段20 誰世にか[△]誰世わか

〃 〃 〃 露[△]下草[△]露の下草

五九三頁下段6 秋はなかはを[△]秋のなかはを

五九六頁上段17 ゆきはし[△]かれる[△]ゆきは[△]かれる

〃 〃 〃 あふをかき[△]りの[△]あふをま[△]れる

〃 〃 〃 うは玉の[△]ぬは玉の

下段6 秋の時[△]花の時

五九八頁上段2 かはらやに[△]河嶋に

六〇一頁上段1 舟おさの[△]舟をさの

〃 〃 〃 下段9 関にさはらぬ[△]浪にさはらぬ

六〇三頁上段10 けきをれの[△]ゆきをれの

六〇四頁下段11 をらんとて[△]をしむとて

六〇六頁下段12

この他、五六三頁下段2の歌の第二句「空よりなして」の「な」は公美筆写本では一字分アキになつてゐる如き場合があり、逆に同段11の第四句「梅……」が公美筆写本では「梅もふるえは」となつてゐるやうな例もある。又、五六一頁下段15初句には「声のあやを[△]」、六〇三頁上段最後の歌の末句には、「初雪やふる[△]」の如き異本の校合が施されてゐる。これは特殊なものである。架蔵A本にも類題本にもこの歌は見えないものであるから、何本による校合であるか未詳であるが、とにかく公美によつて、本文の筆写

時よりは後に加へられたものと思はれる。

四

公美筆写本についての概略の紹介を終るに当り、この本の調査によつて判明した諸点を列挙して、本稿の結論としたい。

(1) 公美筆写本は、その奥書によつて、宝暦二年二月十五日に写し終へたものであることが明かである。

(2) 公美は十巻本を刊行するに当つて、天明元年とする叙を加へてゐるので、この時点では、父の写したものと、自ら写したものと、二本の漫吟集を所持してゐたことになる。

(3) 公美は漫吟集刊行に当つて、父と契沖との関係を世に公示するために、父の写したものの方を採択した。

(4) 公美筆写本は、管見に入つた漫吟集諸本の中では、十巻本に最も近いものと思はれる。

(5) 現存の十巻本は、その序と本文内容とに矛盾があるが、公美筆写本によつて、十巻本は二十巻本の前半であり、その後半は未刊のまま散佚したものであることが明確になつた。(この点拙稿「漫吟集伝本考——拾貝和歌集について——」に於ける推量は訂正すべきである。)

(6) 十巻本所載の序は、元来存したものであることが明確になつた。(前拙稿の推定を訂正する。)

(7) 公美筆写本の序と比較することによつて、十巻本の語句の一部の補訂が可能であり、「下河辺長流序」とする署名は、公美が刊行に當つて加へたものであらうと推定される。

(8) 公美筆写本の前半と十巻本との対比によつて、十巻本以後の契沖による漫吟集補訂の跡をたどることが出来る。

(9) 公美筆写本の前半との対比によつて、十巻本の誤脱を訂正することが出来る。

(10) 十巻本との対比によつて、公美筆写本の原本は、契沖自身による漫吟集成長史に於ける最終段階を示すものであらうと推定することが出来る。この点に関しては、架蔵A本に於ける校合諸本との対比、未見諸本の発掘調査の結果を待つ必要があるが、今の時点では、一応このやうに考へる可能性があると思ふ。

本稿は昭和四十二年度文部省科学研究補助費(総合研究)による研究成果の一部である。本研究に當つて、公美筆写本の調査撮影を許された西尾市立図書館長に謝意をする。なほ公美筆写本の全巻は、近くK碧沖洞叢書に加へて刊行する予定である。

「国文学研究」原稿募集

一、次号締切日 十月三十一日

一、枚 数

原則として四百字詰原稿用紙三十枚以内
別に八百字程度の要旨を添えること。

一、応募資格

早稲田大学国文学会々員に限る。なお、住所、卒業年度、職業を書きえること
編集委員会が決定する。

一、採 否

一、応募先

文学部国文学専修室内「国文学研究」編集委員会
以上